

北海道開発音頭をもう一度



山中 憲治 (やまなか けんじ)

1949年小樽市生まれ。72年北海道大学法学部卒。同年北海道開発庁（現国土交通省）入庁。建設省（当時）建設振興課長補佐、北海道開発局総務課長などを経て、北海道開発局開発監理部長で退官。その後（財）北海道河川防災研究センター（現（一財）北海道河川財団）、北海道建設業信用保証（株）に勤務し、20年退職。東京都在住。

1 北海道開発局は、コロナ禍の昨年7月、開局70周年を迎えた。変異するウイルスに翻弄され大きく傷ついた日本の社会・経済を、北海道の力で回復させよう。今、必要なのはそのための音頭取りだ。さあ、力強く音頭を取ろうではありませんか！…という趣旨の話では全くないので、誤解のないようお願いします。

日本人の身体には音頭のリズム、あのドドンガドン、ドドンガドンが染み込んでいる。

そのため、好むと好まざるとにかかわらず、広場などから音頭が聞こえてくると身体が勝手に動いてしまう。ハァ〜、ソレ、ヨイトってな具合にです。

多くの日本人が、ビートルズの「イエロー・サブマリン」には無反応でも、大瀧詠一の「イエロー・サブマリン音頭」（歌：金沢明子）には敏感に反応していた理由は、これだったのだ。

さて、北海道開発関係者なら殆どの方がご存じの筈の曲に「北海道開発音頭」がある。

けれど、今更知らないなんて恥ずかしくてとても口にできないという方もおられるだろう。そういう方のために、私が一肌脱いで解説して差し上げようというのが、本稿なのだ。

エッ、殆どの方が、恥ずかしい組に入るって？

2 実は、私もこの曲を知ったのが今から15年程前。インターネットで北海道関係の調べ物をしている時、

本命事項と無関係に、何かの年譜の中から「北海道開発音頭」の文字が目飛び込んできた。

だが、関連情報も解説も全く無しで、只これだけ。この思わせ振りで私の知的探求心を刺激せずにはおかない憎いやり方が心に残るのは当然のことだった。

以来、この音頭がナニモノなのかを知ろうと資料を漁る日々が続き…ってな訳はなかったけれど、何かの間違いで時おりこの名前が頭をよぎったことは事実で、この辺りは北海道開発関係者の一員だった身の性・業というものだろう。

先日、何の気なしに検索してみたら、YouTubeと昭和館（戦前戦後の日本人の生活を伝えるための国立博物館 東京都千代田区）に、あった！ありました「北海道開発音頭」。

YouTube はアップ後1年半で聴いた人が90人強に留まっており（2021.12.1現在。うち約30人（回）は、敢えて名を秘すが、同一人物だと判明している）、これは、この歌が如何に玄人好みかということの証左でもある。

皆さんも玄人筋の方々。所在地の関係から昭和館（音質良好）で聴ける方は限られるので、YouTubeで聴いて我が「北海道開発音頭」を歌いましょう。

3 この音頭、YouTubeでは、1957（昭和32）年に、HBC北海道放送、全北海道邦楽邦舞協会と全北海道

歌謡連盟の選定により作られたとあるが、コロムビアレコードの総目録には、1954年、北海道酒類販売株式会社選定歌と記載されている。総目録の前後の曲が1957～58年なのに、この2曲だけ1954年とあるのが奇妙といえは奇妙^(注1)。レコード番号から見て、総目録で一つ前に記載されている「北酒販の歌」がA面、音頭がB面である（企業の社歌との組合せが不思議）。

そこで、レコードの制作委託元と思われる北酒販に照会したところ、古い話でもあり、関係者に問い合わせるなど親切に調べてくれたが、本社の引越しが行われた等の事情もあってレコードの所在や経緯は確認できなかったとの回答を得た。御大星野哲郎作詞で当時の歌謡曲そのものといった感のある「北酒販の歌」も、今では使われていないとのこと。

また、北海道放送からは、音盤や歌詞は保有していないとのことではあるものの、選定団体や作曲者、演奏バンドについての教示を得た。

同社社史「北海道放送十年」（1963.7刊 北海道放送業務室発行）には、1958年7月の頃に「北海道開発音頭発表会（28日・札幌）北海道歌謡連盟の選定」とある一方、別ページの全北海道邦楽邦舞協会の項に「道博期間中には一般募集による『北海道開発音頭』の普及をおこない反響を高め、テレビによるアンコール放送や、各地への出張公演が活発におこなわれた」とある。

これらや次の事実を踏まえると、選定・作成は1958年、選定元はレコードレーベルにある三者だと考えられる。ただし、発表に先行する募集等の期間と2団体

の結成時期を考えると、実質的には北海道放送の選定と考えて良いのではないだろうか。

- ・両団体については、番組編成方針として郷土文化・芸能開発に力を注ぎ電波を通じて全国に紹介することを掲げた北海道放送が中心となり、1958年4月～5月に結成された旨、同社史の「放送を支える外郭団体」の項に記載されていること^(注2)。

- ・北海道大博覧会の開催期間は1958年7～8月であること（北海道放送は博覧会の協賛者）。

なお、博覧会は、1957年度からの北海道総合開発計画第二次5か年計画を踏まえて、北海道開発の現況を内外に紹介し北海道の産業や貿易の進展と文化向上に寄与することを目的としたもの。北海道開発庁長官が名誉総裁、北海道知事が総裁で、札幌と小樽の会場に多数のパビリオンを設置して開催された。

博覧会がメインの桑園会場に設けたテーマ館は、総合開発館である。

「北海道開発音頭」はその名のとおり、まさにこの博覧会の趣旨に則したものだ^(注3)。

北海道放送は、放送開始（ラジオ）が北海道総合開発計画第1次5か年計画のスタートとほぼ同じ1952年3月だったこともあり、文化開発の面から総合開発の一翼を担うという意識を明確に持っていた。当時、北海道開発に関する番組を多数手掛けている。

また、全北海道邦楽邦舞協会（現（一社）北海道邦楽邦舞協会）は、設立の1958年4月以来、毎年、北海



図1 北海道開発音頭レコード「番号2 P5272」
コロムビア総目録上では「1 P5272」



図2 「北海道放送十年」目次
総合開発の一翼になう電波企業

注1 コロムビアレコード邦楽SPレコード総目録の「戦後委託盤」欄に記載。

注2 現在、団体と同放送とに特別の関係はない。

注3 「道博」は北海道大博覧会の通称。正式テーマソング（音頭）は「札幌音頭」（同博覧会協賛会選定）だが、そのレコードレーベルには何故か「北海道開発大博覧会協賛会選定」とある。

道邦楽邦舞大会を開催しており（この2年はコロナ禍のため休止）、レコードレーベルの「藤間園衛」氏は当時の会員で藤間流の家元だったと思われるとのことだが、残念ながら、音頭への関わりを含め現状ではこれ以上は不明である。

全北海道歌謡連盟については、同名の団体が確認できず、類似名の北海道歌謡連盟事務局に照会したところ、現連盟は1980年頃の結成で、以前の団体については承知していないとのことだった。

4 音頭の作詞者、作曲者と歌手について見てみよう。

作詞者の池野美千留氏には釧路管内鶴居村の「鶴居音頭」があり、YouTube に踊り入りの動画がアップされている。東京都福生市の「福生音頭」は1966年の作で、全国公募により武蔵野市吉祥寺に住む池野氏を選ばれたとある。作曲は万城目正、歌は都はるみに杉良太郎と気合が入っている分、振付けも写真入りで載っている。「新立川音頭」や、「明石市民の歌」というものもあり、これらも公募で選ばれている。

作曲の桑山真弓氏は、アコーディオン奏者、作曲家で、北海道放送専属バンドのリーダー（「北海道開発音頭」の演奏はHBCスイングオーケストラ）。同放送によると、専属バンドは1953年の発足。小編成時はリズムスターズ、大編成時はスイングオーケストラと称し、北海道内の一流バンドとして番組やイベントで活躍した。桑山氏は札幌市民文化奨励賞を受賞した北海道音楽界の重鎮であり、北海道の曲を650曲以上作ったとされる。「石北峠」をご存じの方は多いだろう。

歌手の高畑行雄氏には「奈井江音頭」、歌菊姐さんには「江別音頭」がある。

更に、高畑氏には「北海道清酒の歌」があり（前述の「北酒販の歌」とは別の歌。北海道酒造組合制定で、この作曲も桑山真弓氏）、呑めや歌えや、「これだっ」「こっちを教えて」と膝を乗り出したお父さん・お姉さんがいるかもしれない。しかし、こちらは本題ではないのでスルーさせていただく。

日本音楽著作権協会（出）許諾第2110369-101号

5 閑話休題。お待たせの「北海道開発音頭」。

以上のような次第で、印刷された歌詞を入手できなかったため、音盤から聴き取るしかない仕儀に立ち至ることとなった。

だがしかし、78回転SPレコードの故か、民謡歌手独特の声の高さのためか、当方の耳が加齢により高音部を拾えなくなっているからなのか、所々歌詞に明瞭さを欠く恨みが残る。

聴き取った歌詞は、以下のとおりだが、ゴシック部分が心許ない。その分、皆さんがご自分で聴き取る楽しさが残ったともいえる。^(注4)

- (1) ^ハァー 開け 耕せ 北海道は 山と海との ^{たから}宝
^{くら}庫 チョイト
開いて 開いて 精出して でっかい希望の国作り
ソレ ドントコリヤ ヨイヨイ ヨイトコリヤセー
- (2) ^ハァー 沖じゃ魚が 踊って跳ねる 山じゃ山
積み 黒ダイヤ チョイト
開いて 開いて 手を組んで 末は見事な国作り
ソレ ドントコリヤ ヨイヨイ ヨイトコリヤセー
- (3) ^ハァー 力合わせた 原野の道を 今日 ^{よめ}嫁子
が ^{そり}櫓で来る チョイト
開いて 開いて 家建てて 二人仲良く国作り
ソレ ドントコリヤ ヨイヨイ ヨイトコリヤセー
- (4) ^ハァー 昨日 ^{たいせつ}大雪 今日また洞爺 明日は阿寒
の ^{丸い}月 チョイト
開いて 開いて 働いて 夢も楽しい国作り
ソレ ドントコリヤ ヨイヨイ ヨイトコリヤセー

どうです、この能天気というか純粹培養怖いもの知らずというか、空を見上げる輝く瞳。開拓時代的な要素も色濃く残っていた戦後日本、昭和日本の時代精神と心意気が表われている名音頭というしかない。



図3 馬櫓で原野を越えて来な〜（絵は筆者）
この頃、馬櫓はまだ冬の道路輸送の主役だった

注4 ゴシック部分は音声聞き取りにくい箇所。漢字は推定。

宝の大地で、精出して、力を合わせて、働くのだ。
この国土建設の槌音も高い歌詞は、お国自慢型音頭とは二味も三味も異なるものだろう。

さあ、聴いてください。皆さんに至福の3分間を保証いたします。

6 ここで、「踊りはどうした?」と大向こうから声
が上がる…筈だ。

音頭とくれば、浴衣を着て「ハァー、それっ」、両手を上に（この時、片手には団扇が握られていなければならない）、とまあこうくるのが、ある年齢以上それも日本人の主流を占める高齢ゾーンの人々の自然な反応であります。

藤間園衛師匠の振付。これがどういうものなのか現在は不明だが、当時地元唯一の民放、北海道放送の肝入りだったから、北海道内でソコソコ普及していたと推定するのが素直な理解というもの。(注5)



図4 この道博シンボルマークを覚えておられる方、音頭を思い出してくださいー!

もしかしたら、当時の開発事業関係者や北海道開発局職員かその家族で「いつか君と踊った音頭が…」「そうそう、揃いの浴衣着てね」なんて御仁がおられるかもしれない。思い当たる方はぜひご一報を。

振付が不明だからと諦めてはならない。絶望は愚か者の結論である(B・ディズレーリ)。情報が無ければ、勝手に想像・創造するまでだ。創造力は北海道の原点である(詠み人知らず)。

この時代、北海道は、日本の明日を支えるべく、「開いて開いて」、前進、前進また前進だったのだ。

当然、「北海道開発音頭」は世にあまたあるナントカ音頭とは志からして違う。分かりますね。

だから、この踊りの特徴は、①止まらない、②後ろに下がらない、③下を見ない、の三点だったに違いない…のだ。

こういう踊りは忙しいし、疲れるけれど、他の音頭とはレベルが違うのだよ。レベルが。ソレ!

さあ、聴いてください。皆さんに至福の3分間を保証いたします。

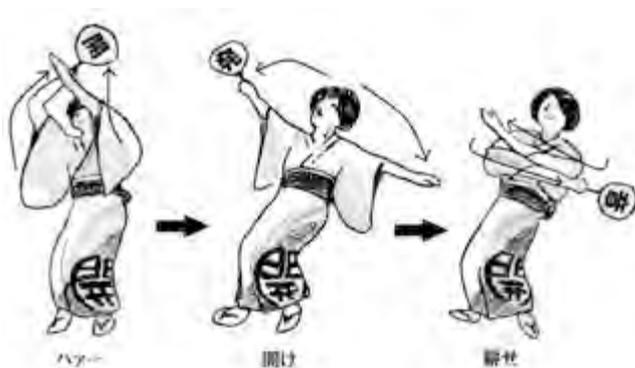


図5 例えばこんな踊り(絵は筆者)
例によって、この振付で皆さんが赤恥をかいても、筆者は一切関知しないのでそのつもりで

7 残念なことに、今日、「北海道開発音頭」を街のイベントで耳にすることは無い。

全面的に戦後日本・昭和日本を歌っているから、街から消えていったともいえるだろうが、音頭は成熟した音楽であり流行とは無縁なので、時代とともに消え去るとは限らない。歌詞が古くなくても、ある時代の文化遺産として歌い・踊り継いでいくことができるものだ。

この音頭の今日を招いた原因は、遺憾ながら、その名の「北海道開発」にあると考えざるを得ない。

名前が「北海道大博覧会音頭」だったなら? いや、会場は市場用地や公園、港だったから受け継ぐ住民が居なかった。では、「北海道音頭」だったなら? 道民が主役として繋ぎ続けていたかもしれない。

だが、「北海道開発音頭」だ。住民にとっては、郷土で開拓・整備を行うという発想と比べると、国作りの総合開発を行うという発想は距離感があるし、国策事業なので主役が道外にも大きく広がる。

こうして、博覧会終了後は、ご当地性曖昧、当事者感模糊となり、哀れ落剥の身を嘆く次第となったということだろう。

しかし、この考えは、音頭は地域共同体のものという固定観念に支配され過ぎている。

視点を変えて、北海道開発関係者の職域共同体音頭、これならどうだ!

さあ、「北海道開発音頭」をもう一度。ハァー

注5 北海道2番目の民放、札幌テレビ放送(STV)の本放送開始は1959.4.1(STVはテレビが先)。